

金民論 —— 在日朝鮮女性を描いた小説家

宋恵媛 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

1953年7月、朝鮮戦争休戦の数日前に「夫婦喧嘩。」(*印は朝鮮文、以下同)と題された朝鮮語のコント(短編)が日本で発表された。朝鮮語識字学習のための夜学に出かけたい妻とそれを快く思わぬ夫の在日朝鮮人夫婦間の諍いが、夫の暴力も含め克明に描かれた作品だ。許南麒や金達寿がそうだったように、1950年代当時の在日朝鮮人の文学の主流は、外勢に対する朝鮮民衆の抵抗といった政治的テーマについて書くというものだった。植民地支配からの解放、分断国家の樹立、戦争勃発と、目まぐるしく朝鮮半島情勢が変化するなか、このような主題が選ばれたのはある意味必然的だったが、在日朝鮮人社会のドメスティックな問題を、朝鮮の封建的遺習や日本社会に深く根を張る植民地主義とともに描き出した「夫婦喧嘩。」は、そのなかで異彩を放っている。本稿で取り上げるのはその作者である男性小説家、金民(1924年~1981年)である。

金民の作家としての活動期間は1952年頃から1967年頃までの約15年間である。「解放」直後から、朝鮮人学校を数多く建設した当時最大の朝鮮人大衆団体、在日本朝鮮人連盟(以下、朝連と略記)に集った作家たちを中心に、在日文学運動がさまざまに模索された。だが冷戦開始に伴い米・日の在日朝鮮人政策が敵対的なものとなり、1949年に朝連が強制解散させられると、文学活動も大打撃を受けた。金民は、在日文学運動が停滞していた時期に作品発表を始め、その後、朝鮮民主主義人民共和国(共和国)との直結によって盛り返し、朝鮮語での創作運動が全盛期を迎えた時にその中心にいた。1950、60年代に在日文学団体で果たした役割の大きさと、当

時の共和国当局からの高い作品評価にもかかわらず、これまで論じられたことはほとんどない。

「解放」まもない時期からほぼ朝鮮語のみで小説を書いたこと、そして身近な同胞女性を多く描いたことが、この作家を特徴づけている。「解放」当初から朝鮮語で執筆活動をしえた在日作家は、実は多くはない。若い在日文学徒たちは日本語により習熟していたし、朝鮮半島での朝鮮語復活期には、政情不安により日本-朝鮮間の人や情報の行き来が滞っていた。大量印刷のための朝鮮語活字の調達困難、民族教育弾圧等の物理的、政治的な悪条件も重なり、朝鮮語での出版自体、困難だった。とくに朝鮮語での小説の書き手はごく限られており、1950年代以前では李殷直(1916年生)、朴元俊(1917年生)、金慶植(1918年頃生)、柳碧(1922年生)らの名が挙げられる程度だ。また、同胞女性の表象については、初期に活動した無名の在日女性作家たちを含め、他の在日作家も多少は同胞女性を題材にして書いたが(許南麒『火繩銃のうた』(1951年他)、金元基「姉の結婚」(『民主朝鮮』1946年)、金希求「大阪の街角で」(『ヂンダレ』1954年)、金テギョン「妻。」(『朝鮮新報』1963年)、ソ・ヨンホ「分会委員夫婦。」(『朝鮮新報』1968年)等)、金民のように第一世代の女性の造形に持続的に取り組んだ小説家は皆無といっている。もっとも、金民の以上のような二つの特徴は、彼が忘れられた作家となった要因でもあった。いずれの点もこれまで注目されることは稀だったからだ。以下、その知られざる生涯と作品について詳しく論じていきたい。

1. 来歴と作品

金民は北部朝鮮の咸南^{ハムナム}で1924年7月20日に生まれた。金達寿、許南麒、李殷直ら第一世代の作

家たちより6~8歳年下である。1930年代後半から本格化した皇民化教育を10代で受け、朝鮮人と台湾人への半強制的な‘特別志願兵’の募集が行われたとき、まさにその対象になった世代である。じっさい、同世代のミステリー作家、麗羅（1924年生）と詩人で評論家の具林俊（1926年生）は、日本の皇軍兵士として「解放」を迎えている。なお、金民と親しかつたという、大長編『火山島』の作者、金石範（1925年生）は済州島とソウルに逃れ、徴兵を辛うじて免れている。

金民は上記の在日作家たちと異なり、朝鮮で生まれ育ち、「解放」を迎えたとみられる。これは彼が急激な朝鮮語の復活を身をもって体験し、また知識人青年として、「解放」後の朝鮮内でのイデオロギー対立の渦に投げ込まれたことを意味する。渡日の詳細な経緯は不明だが、その手がかりの一つとなるのが自伝的作品と目される短編「晴れない空*」（1956年）だ。死と隣り合わせだった朝鮮での日々とのギャップに戸惑いながら、平和を享受する敗戦後の日本で日雇い労働をしつつ、己が何のために生きているのか煩悶する亡命者の物語である。元中学教師のヨンファンは、学生を扇動したという罪状で釜山で酷い拷問を受け、日本に命からがら密航してきたと設定されているが、おそらくこれは金民の実際の経歴と近いのだろう。渡日時期が朝鮮戦争前だったろうことは、随筆「故郷自慢・咸南篇*」や、在日同胞たちの外国人登録法への抵抗を描いた短編「S村登録反対闘争*」を発表する1952年末以前には、どの在日民族媒体にも名前が見られないことから裏付けられる。

1950年代を通して金民は在日民族新聞（朝連および在日本統一民主戦線〔民戦〕の準機関紙『解放新聞*』）の記者として活動した。その傍ら『解放新聞*』、民戦と近い関係にあった在日朝鮮文学会の機関誌『文学報』、金石範や金鐘鳴らが大阪で創刊した『朝鮮評論』（いずれも日本文）に作品を発表した。

金民が組織活動家として頭角を現すのに時間はかからなかった。1953、4年頃には在日朝鮮文学会の書記長に就任し、日本人たちのサークル運動に呼応して各地で盛んになっていた在日朝鮮人青年の文学運動を評価し、監督する任に当たった。在日朝鮮文学会が朝鮮戦争休戦直後か

らピョンヤンとの密な連携を図っていく際に、両者の連絡役も担った。在日本朝鮮人総聯合会（総連）傘下に入った同会で朝鮮語創作推進派が主導権を握った1957年には、共和国文芸政策に否定的だった日本語作家の金達寿や金時鐘らを「文学伝統に対する虚無的態度」、「日本の反動的近代文学」、「比較文学的趣味」と批判する報告文を共和国作家たちに送り、その在日作家評価に直接的影響を与えた。詩人の許南麒、南時雨とともに、在日作家として初めて朝鮮文学会同盟正盟員として認定されたのも、同じ年のことだ。共和国への「帰国」実現に押されて総連が勢力を拡大するなか、在日朝鮮文学会は1959年6月に在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）へと組織改編されるが、その初期に金民は事務局長や文学部長等の役員も歴任した。

「金民作品一覧」に示したように、金民は朝鮮語を用いて童話、随筆、評論等、幅広い執筆活動を行った。最も力を入れたのは短編小説で、2編のみ日本語作品で書かれたが（そこからは日本語能力の高さがうかがえる）、両作品とも後に朝鮮語で書き直された。1960年代に入り、文芸同機関誌『文学芸術*』創刊や総連機関紙『朝鮮新報*』の日刊化が実現すると、それらの媒体で継続的に短編を発表するようになった。この頃には、社会主義祖国公民としての矜持を持つ模範的な在日同胞たちの形象に取り組んだが、これはピョンヤンの文芸方針を資本主義国日本で適用した結果であり、同時期の文芸同作家全体の傾向でもあった。それ以外のテーマを持つ作品には、「解放」直後、朝鮮人帰還者を乗せた輸送艦が、舞鶴市佐波賀沖で爆破された浮島丸事件を題材とした「海の道*」（1960年、未完）、椎名悦三郎外相の訪韓を阻止するため、決死のピラ撒きを行うソウルの学生を描いた「初試練*」（1965年）等がある。むろんこれらも、米国や日本政府への批判と憎悪、帰国船就航、日韓基本条約反対と並ぶ、当時のピョンヤン文芸方針の具現だった。

金民の作風には新聞社での経験が大きな影響を及ぼしているとみられる。在日朝鮮人発行媒体の中でも、『解放新聞*』や後継紙『朝鮮民報*』は、朝鮮人の生活に密着した記事を抜きん出て提供していた。職業安定所や役所への職よこせ闘争や、「密酒」取り締まり、生活保護の減額や

取消し、警察官による一般の朝鮮人への暴行に対する抗議行動等の記事、同胞集住地のルポルタージュ、家出した妻や母を探す尋ね人欄、読者投稿欄など、両新聞の最終面には在日女性たちの姿が見え隠れしている。作中人物や細部のエピソードに、実際の新聞記事と似通ったものが散見されるように、金民が同胞女性の暮らしぶりに接する機会は、他の男性作家に比べて格段に多かったとみられる。

1967年発表の、総連機関紙配達をめぐる朝鮮学校教師と総連分会長とのやりとりを描いた短編「八月」を最後に、突然金民は表舞台から姿を消す。そして1981年に57歳で早逝した。その5年後にピョンヤンで刊行された遺稿集『明け方*』（1986年）が、金民の唯一の作品集である。

2. 作品分析

金民は在日朝鮮女性を主人公にした作品を多く書いた。冒頭に挙げた「夫婦喧嘩」の他にも、シングルマザーの民族教育闘争を扱った「西粉の抗議」（日本語版、朝鮮語版）、二世女性の心の動きに迫った「試写会」（日本語版、朝鮮語版）、ある既婚女性が「帰国」を決心する過程を追った「目覚めた人形」、大阪に住む40代半ばの女性の一代記「母の歴史」、地方の民族学校で奮闘する30代の女性教師を描いた「抱擁」、朝鮮大学校に進学した息子を訪ねるため、生まれて初めて青森から上京した母親を主人公にした「明け方」等である。

本稿では、その中から「西粉の抗議」、「試写会」、「母の歴史」という完成度の高い3つの作品を取り上げ、そこで描かれた在日朝鮮人たちの言語状況や視点人物の設定などに着目しながら、その女性表象を検討していきたい。

ソプニ 「西粉の抗議」 (日本語版1953年、朝鮮語版1954年)

「西粉の抗議」は1953年にまず日本語で発表され、その翌年に朝鮮語で書き直されて『解放新聞』紙上に連載された。朝鮮語版では、近所に住む老婆の人物像が大きく変更されたり、新たに若い二世の女性活動家が登場したりするほか、職業安定所の詳しい描写やソプニが夜学で

学ぶ場面等が新たに挿入されている。両者の比較分析は紙幅の都合から稿を改めることにし、ここでは日本語版を中心にみていきたい。

40歳をはるかに越したソプニ（1900年代後半生）は、焼酎を造り、豚を飼い、職業安定所での日雇い労働をして生計を立てている。小学生の一人息子、永洙が通う東京都立朝鮮学校の設備補充や、日本人の代わりに朝鮮人教員の採用を求める要請運動にも日参するソプニの生活は困窮し、学校に納めるお金も工面できないでいる。困ったソプニはある早朝、久々に職安に出かけようとするが、隣家のチルソン七星婆さんからこの日の抗議活動に参加しないことを咎められ言い争いになる。結局、雨が降って日雇いの仕事はなくなり、二人は連れだって500人あまりの抗議者が集まる東京都教育庁へ向かう。教育長が現れずしびれを切らした人々は課長室になだれ込むが、課長はまともに取り合わない。思わず課長の前に踊り出たソプニは、たどたどしい日本語で自らの思いをぶちまける。

ソプニは「解放」の年の夏に夫を炭鉱事故で亡くし、買い出し、屑鉄拾い、行商等、在日朝鮮女性にできるあらゆる仕事をしつつ、全ての望みをかけ息子を育ててきた。息子のノートも読めないが、それだけに朝鮮人学校を守りたい気持を強く持つ。他方の七星婆さんには、大村収容所とみられる「収容所」に送られ大韓民国（韓国）への強制送還を控える息子がおり、「いつ、奴らに殺されるか分からない」と李承晩政権に不安と怖れを抱いている。

この短編を豊かなものにしてしているのは、作中の女性たちの発する声だ。抗議活動に行くかどうかで二人が揉める場面では、「こんなに朝早く、私に他にいくところなんかあるかね？朝鮮に行くんだって、こんな手ぶらでおめおめかえられるわけでもなし…」、「人間の形をしているものは誰だって引っぱっていききたい」など、深刻な中にもユーモアを滲ませる七星婆さんの絶妙な語り口が写し取られる。

当時の在日朝鮮人たちが、たとえ日本語で会話していても日本語に置き換えることなく、そのまま朝鮮語で使っていたとみられる「在日朝鮮語」とでもいうべき単語が、意識的に写されている点も注目される。「ソンセンニム」（先生）、「イノムセッキ」（この畜生め）といった

金民作品一覧

*印は朝鮮文, (평)はピョンヤン刊

作品名	掲載紙誌名, 号, 面	発行日
【童話、童謡】		
「少年の歌 [소년의 노래] *」全6回	『解放新聞』2面	1953. 3/27, 30, 4/2, , 7, 14, 16
「我らの旗 [우리 깃발] *」	『解放新聞』2面	1953. 5. 14
「手紙 [편지] *」	『解放新聞』2面	1953. 5. 16
【短編小説】		
「S村登録反対闘争 [S 촌등록반대투쟁] *」	『解放新聞』2面	1952. 12. 20
「夫婦喧嘩 [부부싸움] *」	『解放新聞』4面	1953. 7. 23
「西粉の抗議」	『文学報』4号	1953. 8
「試写会」	『朝鮮評論』9号	1954. 8
「西粉の抗議 [서분이의 항의] *」①~②	『解放新聞』1面	1954. 10. 23~12. 30
「壁新聞 [벽신문] *」	『창조』号数なし	1955. 7
「縁談 [혼담] *」	『解放新聞』5面	1956. 1. 1
「晴れない空 [개이지 않는 하늘] *」	『조선문예』4号	1956. 12 (在日朝鮮文学会刊)
「夜道 [밤길] *」	『朝鮮民報』	1957 前半頃
「交通費 [차비] *」	『解放新聞』4面	1957. 9. 7 * 『문학신문』(평,以下同)1957. 10. 17 転載
「試写会 [시사회] *」	『조선문학』(평)129号	1958. 5 * 『영광의 기록』(평) (1958) 収録
「転換 [전환] *」	『朝鮮民報』10面	1959. 1. 1
「母と息子 [어머니와 아들] *」	『조선문예』1号	1959. 12 (文芸同神奈川機関誌)
「海の道 [바닷 길] *」①②	『문학예술』1, 2号	1960. 1, 1960. 3
「目覚めた人形 [눈을 뜨는 인형] *」①~⑤	『朝鮮民報』4面	1960. 2. 1~2. 10
「母の歴史 [어머니의 력사] *」①~②	『朝鮮新報』8面	1961. 1. 1~1961. 2. 18
「初めての挨拶 [첫 인사] *」	『문학예술』4号	1962. 10 * 『문학신문』1963. 5. 21 転載
「抱擁 [포옹] *」	『찬사 [讚辞]』	1962. 4 (在日本朝鮮文学芸術家同盟文学部委員会刊) * 『조국의 빛발아래』(평) (朝鮮文学芸術総同盟出版社、1965) 転載
「春雨 [봄비] *」	『문학예술』13号	1965. 5 * 『문학신문』1965. 6. 15 転載

「初試練 [첫 시련] *」	『문학예술』 16 号	1965. 11 * 『조선문학』 (평, 以下同) 237, 238 号 (1967. 5, 6) 転載
「明け方 [이른 새벽] *」	『문학예술』 18 号	1966. 3 * 『문학신문』 1966. 8. 12 転載
「八月 [八월] *」	『문학예술』 22 号	1967. 8
「母 [어머니] *」	『이른 새벽』 所収	不明
隨筆		
「故郷自慢 [내 고향 자랑] 咸南篇*」	『解放新聞』 2 面	1952. 12. 15
「朝の対陣」	『文学報』 2 号	1953. 4
「何歳だ? [몇 살이나] *」	『解放新聞』 8 面	1954. 1. 1
「母の心 [어머니의 마음] *」	『朝鮮民報』 4 面	1958. 8. 16 * 『문학신문』 1958. 9. 25 転載
「幸福の道、祖国へ [행복의 길, 조국에로] *」	『朝鮮民報』 4 面	1958. 9. 27
「祖国の手 [조국의 손길] *」	『朝鮮民報』 4 面	1959. 12. 18
「文学と生活」	『新しい世代』 8 号	1960. 9. 10
「偉大な変革、新しい人間 [위대한 변혁, 새로운 인간] *」	『朝鮮民報』 4 面	1960. 3. 16
「祖国書籍 [조국 서적] *」	『朝鮮民報』	1961 頃
「ある女教師のはなし」	『新しい世代』 23 号	1962. 2
「創作計画: 「海の道」脱稿 [나의 창작계획: 「바닷길」의 탈고] *」	『문학예술』 18 号	1966. 3
【記事、評論】		
「いま一つの壁を突き破ろう: 金時鐘氏の手紙に答う」	『ヂンダレ』 6 号	1954. 2
「文学サークル運動により大きな関心を向けよう [문학 씨-클운동에 더 큰 관심을 돌리자] *」	『朝鮮文学』 1 号	1954. 3 (在日朝鮮文学会刊)
「『樹林』 九号を読んで [『樹林』 9 호를 읽고] *」	『朝鮮文学』 2 号	1954. 5 (在日朝鮮文学会刊)
「愛国詩人・趙基天逝去三周年を迎えて [愛国的詩人 趙基天 서거 三주년을 맞이하며] *」	『解放新聞』 2 面	1954. 7. 8
「文学サークルについて」	『朝鮮評論』 9 面	1954. 8
「民族教育の成果 [민족교육의 성과] *」	『解放新聞』 4 面	1954. 8
「歴史と民族文化に対する愛着 [력사와 민족문화에 대한 애착] *」	『解放新聞』 4 面	1954. 9. 7
「朝鮮文学だより」	『新日本文学』 10 (8)	1955. 8
「戦後の朝鮮文学」	『朝鮮問題研究』 1 号	1957. 4
「現地ルポ・日立入四間の同胞部落 [現地루포=日立入四間 동포부락] *」 (上) (下)	『朝鮮民報』 4 面	1959. 3. 26, 3. 28
「解放後の朝鮮文学」	『新日本文学』 14 (6)	1959. 6
「注目を集める新人の創作 [주목 끄는 신인 창작] *」	『朝鮮民報』 4 面	1959. 9. 5

「朝から晩まで—朝鮮中央芸術団の公演を見て(若松にて) [낮에 밤을 이어: 조선 중앙 예술단 공연을 보고 (若松에서)] *」	『朝鮮民報』4面	1959. 11. 6
「祖国文学を日本人にもっと広めよう [조국 문학을 일본인 속에 더 널리 알리자] *」	『朝鮮民報』4面	1960. 5. 20
「新しい人間の探求/柳碧作「誇り」の肯定的テーマと人物形成について [새 인간의 탐구/ 류벽작 《자랑》의 긍정적 제마와 인물 형성에 대하여] *」	『朝鮮民報』4面	1960. 6. 27
「生活に対する深い洞察 [생활에 대한 깊은 동찰] *」	『문학예술』3号	1961. 5
「党の呼びかけにもっと立派な創作成果で [당의 부름에 보다 훌륭한 창작 성과로] *」	『朝鮮新報』4面	1961. 9. 30
「南朝鮮の作家たちは「夜明けの道」を早める途につこう [南朝鮮 作家들은 <새벽길>을 앞당기는 길에나서라!] *」	『朝鮮新報』2面	1961. 12. 20
「『洪吉童伝』の作家許筠、その生涯と作品—誕生 393 年に際して [「홍길동전」의 작가 허균 그의 생애와 작품 탄생 393 년에 제하여] *」	『朝鮮新報』4面	1962. 2. 20
「祖国文芸作品の翻訳紹介によりいっそう集体的な力量を発揮しよう [조국 문예 작품의 번역 소개에서 더 한층 집체적 力量을 발휘하자] *」	『朝鮮新報』4面	1962. 4. 9
「現実と人間の奥深い認識: 最近発表された短編小説を読んで [현실과 인간의 심오한 인식: 최근에 발표된 단편 소설을 읽고] *」(上)(下)	『朝鮮新報』4面	1962. 6. 13, 6. 14
座談会「形象性と作家の姿勢: 一九六五年度小説作品について [형상성과 작가의 자세: 1965 년도 소설 작품을 두고] *」(参加者: 金民、林昶相、趙南斗、金石範)	『문학예술』17号	1966. 1
翻訳		
崔明翊「運轉手キルボの戦斗記」	『朝鮮評論』7号	1953. 4
単行本		
『明け方 [이른 새벽] *』	文芸出版社(평)	1986 収録作品: 「이른 새벽」 「8 월」 「혼기」 「차비」 「어머니의 역사」 「첫 시련」 「포옹」 「어머니」

罵声など（逆に朝鮮語版では、「ナカマ」という語が日本語読みされており、労働運動等での朝鮮人と日本人との連帯の歴史を想起させる）の他、本来は抽象的な政治用語である「バンドン」（反動）という言葉がソプニと七星婆さんの会話の中で使われているのが興味深い。作中では、朝鮮人学校を守るために行動しない者や李承晩支持者を指して使われているが、この語が、植民地支配の延長線上に生きる在日女性たちの日常生活に、物質的、精神的な生き辛さの元凶を指す語として自然に溶け込んでいた様子がかがえる。

同作品のクライマックスは、教育庁課長に詰め寄ったソプニが次のように抗議する場面だ。

「え？朝鮮人の子供、あきめくらにするつもりだ？戦争の…戦争のお金はあるだろ、出せ、さ、出せ」「え？朝鮮人は、私は、わたくしは、何も分からないだ。字も分からないんだ。さ、私にも、勉強させろ、私はあきめくらだ、あきめくらだ あきめくらだ」「あんた達は、こんな所に座っている。私達は字もよめない。貧乏だ。私は、文字も分からない。ゴマカシてばかりいて、何とか言え、いえ、いえ、いわんか」（日本語版、9-10頁）

日本社会でソプニの対極に位置する、悠然と沈黙を守る日本人男性の課長に対し、ソプニは流暢でも論理的でもない日本語で声を上げる。それは、民族教育を潰そうとする者への怒り、日本から毎日のように故郷へ爆撃機を送り出す米国と日本政府への憤り、字を読むことができない悔しさ、生活苦への不満がいっしょくたになった、支離滅裂で断片的な、しかし力強い異議申し立てである。金民はこの作品で、異国の言語で抵抗のこぼれを紡ぐ在日女性の姿を、鮮やかに捉えた。

「試写会」 （日本語版1954年、朝鮮語版1958年）

「試写会」は、数え年19歳の在日二世女性（1935年頃生）が、共和国映画を通して「祖国」と繋がっていく様子を描いた短編である。日本語版（1954年）の4年後に、それをほぼ逐語訳し

た朝鮮語版（1958年）が発表されたが、これは共和国内の文学媒体に掲載された初の在日作家の小説となった。

英淑が茨城県N町で800名の観客とともに観る「郷土を守る人々」は、共和国の国立撮影所で1952年に制作された実在の映画である。日本への持ち込みを横浜税関で阻まれ、抗議活動の末にようやく在日朝鮮人たちの手に届いた作品だ。植民地時代に農民夫婦が地主に追放される場面から始まるこの映画では、艱難の時代を耐え、「解放」後に北朝鮮で実施された土地改革により人々が土地を得て豊かになっていく様がクロノロジカルに描かれる。その後まもなくして朝鮮戦争が勃発すると、農民たちが遊撃隊を組織して「米帝とその手先」と戦い、郷土を守り抜くという内容だ。

作中ではヨンスクの家族の物語が同時に進行する。一家はヨンスクが2歳のときに日本へ渡ったが、炭鉱労働者だった父は「解放」の年に病死した。兄は日本人と結婚してから母と疎遠になっている。兄の妻は周囲の人々の朝鮮人への差別意識に屈し、ヨンスク兄妹が朝鮮語で会話するのに目くじらをたて、兄に日本への帰化を強く要求しはじめたため、夫婦間の不和も深まっている。

現在、ヨンスクは在日本朝鮮女性同盟（女盟）の仕事を手伝いながら、子どもたちの朝鮮語教師として働いている。「いま一度も祖国の姿を実感として見たこと」がないヨンスクにとっては、「朝鮮語」がもっとも身近な「祖国」であり、それらをおかし、それらを押しひしごうとするものが、もっとも憎い敵」（日本語版、65頁）だった。「解放」後に少しずつ身につけた朝鮮語が、朝鮮人としての誇りを支えているのだ。

周囲の観客が騒がしく映画の音声がよく聞こえず苛立っていたヨンスクは、流れてくる会話を実はほとんど解せず、日本語字幕に頼っていたことにふと気づいて愕然とする。自尊心を打ち砕かれて涙を流すも、前に座っている母に悟られまいとあわててそれを拭く。ヨンスクはかつて女学校への進学を母に反対されて諦めたが、その理由が、兄の商業高校の学費で家のお金を使い果たしたというのに加え、学校に行かせると兄のように日本人化してしまうと母が恐れたためだということで、自分を信用しない母

に不信感を抱いている。試写会の間、近所の朝鮮人のお婆さんやおじさんと一緒になって大声で笑い踊る母は、朝鮮人丸出しで知性や上品さとは無縁だ。ヨンスクは在日二世らしく、会場の日本人たちの目が気になる。だが、ときおり母から朝鮮語を教わらねばならず、それに引け目を感じていた。母の身体化する「朝鮮性」を前近代的で遅れたものと見做しながらも、他方ではそれを羨んでいるのだ。

作中では、当時の在日朝鮮人たちの複雑な言語環境もさりげなく語られる。ヨンスクらを取り戻すべき「朝鮮語」は、必ずしも一世の父母から受け継ぐものではない。親子間での朝鮮語の継承は、厳しい日本社会に適應する必要から日本語が優先されたこともあり、多くの場合成功しなかったといわれるが、これに拍車をかけたのが「町内に住む朝鮮人は、出身地方がまちまちであるだけに、方言がひどく、発音も正しくなかった」(65頁)という現実だ。良くも悪くも、画一化と規範化がされた正統的な「国語」としての朝鮮語がこの時点で確立されていなかったことが、同作品では浮き彫りにされている。では、ヨンスクが獲得すべき新たな朝鮮語とはどのようなものだったのか。それは映画の終盤で明らかになる。遊撃隊隊長が金日成元帥の人民への訓示を引用する場面で、ヨンスクの心境に大きな変化が訪れたときである。すでに一字一句学習済みだから全て理解できる金日成訓示が、祖国の人によって実際に発音されるのを聞き取ることで、ヨンスクは「祖国の姿をさする実感」(68頁)を感じ、彼女の心は訓示を聞き終えて前進を始める「祖国」の遊撃隊員たちのそれと重ねあわされるのだ。夜遅くに上映が終了すると、ヨンスクは一緒に帰ろうと言う母を振り返りもせず、帰路につく人々の波をかき分け、会場の片付けを手伝うため前方の演壇に向かう。二世が一世を乗り越えて「祖国」とその言葉を獲得する瞬間である。「解放」後もない時期の二世女性の心理をそのナショナリズムと絡めて繊細に描き出すと同時に、混沌期の在日朝鮮人の言語様相を浮かび上がらせた作品である。

「母の歴史*」(朝鮮語、1961年)

「母の歴史*」は、朴^{パク}ジェハ青年が姜^{カン}アジュモニ[おばさん]の身の上話に夜通し耳を傾けるという筋立てだ。物語時間は、1959年8月に日本政府と共和国赤十字間で締結された帰国協定の、1年3か月という期限が迫る頃、つまり作品発表と同時期である。姜アジュモニの次のような言葉からこの短編は始まる。

「私の話ですか？アイグ、なにか自慢できるようなことがなくちゃね」

在日二世のジェハは東京朝鮮中高級学校の文学教員で、地方実習の一環として大阪を訪れ、そこでの経験をもとに小説を執筆する予定を立てていた。豪傑と名高い女盟活動家の姜アジュモニ宅に他の青年たちと寝泊まりしながら彼女に話を聞こうとするが、朝鮮大学に通う息子を持つ、45歳(1915年頃生)という年齢よりずっと老けて見えるアジュモニは、帰国協定延長要請運動で忙しいこともあり応じようとしない。そんななか、大阪滞在最終日の夜中にジェハが煙草を吸っているところにアジュモニが加わり、帰国船について言葉を交わしたのをきっかけに、彼女はようやく自分語りを始める。夜に始まったのは必然だ。作中で細やかに描写されるように、日中は労働や家事、子どもの世話に追われ、夜も遅くまで草履の紐編みなどの内職をする在日女性たちが自分のための時間を持つのは、家族が寝静まった夜中だけなのだ。

玄海灘を何度も行き来したアジュモニの半生は、次のようなものだった。祖父は朝鮮の地元有力者間の争いに敗れて出奔し、漁師の父はある日海に出かけたまま帰ってこなかった。そのため少女時代は、祖母、母と魚を売りその日をしのぐ暮らしをした。祖母は貧しさに耐えかね地を打ち慟哭したものだが、母は悲嘆にくれることは決してなかった。姜アジュモニは、そんな芯の強い母の背中を見て育った。長じて結婚し、先に行った夫の住所を記した紙切れが入った封筒一通を握りしめ、初めて玄海灘を渡り大阪へ行くことになる。夫と働いていた木材工場が空襲で焼けたため日本の敗戦直前に一度朝鮮へ帰ったが、預けておいた荷物を取りに敗戦後すぐに夫婦で再び大阪へと渡り、そのまま朝鮮に戻れなくなり日本で暮らすようになった。「女

は結婚して夫と子に従えというが、父母が幸福でなくて」という信念を持って夫と対等な関係を築くも、1948年の阪神教育闘争時に彼女が警官に食ってかかったために拳銃で殴られ留置場に捕らわれている間に、夫は死んでしまう。このとき息子はたった12歳だった。数年して朝鮮戦争が勃発すると、「ヤミ船」に乗り込んで玄海灘往復を取行する。反李承晩派の兄が行方不明となり、韓国に残された母と兄の妻が「アカ狩り」の犠牲になることを懸念し、二人を避難させるためだった。その後、現在に至るまで、日本人に差別されたまま黙ってられないという意地を原動力に、組織活動家として精力的に飛び回っている。

決断力と行動力のある一世女性の生きざまを紹介し、その語りをそのまま写し取ったこのような小説は、他の在日作家たちの作品には見られないものだ。「母の歴史。」は総連機関紙である『朝鮮新報。』紙上で連載されたが、ここからは同作品が女性読者を意識して書かれたであろうこともうかがえる。発表時である1960年代初めは、「帰国」実現が追い風となって多くの女性たちが文字を学び出し、しだいに彼女たちの随筆や手記、日記等が『朝鮮新報。』の紙面に掲載されるようになった時期だ。だが、文字を習いたての女性たちの文章は、編集部による内容や語句の修正を経たであろう断片的なもので、内容も文字獲得の感激、植民地期の回想、金日成への感謝などに偏る傾向があったのも事実だった。その意味では、女性の語りにじっくりと耳を傾け詳細に記述した「母の歴史。」は、当時の朝鮮女性たちのライティングを補完する働きもしている。

だがこの作品には、今の時点からみると明らかな弱点もある。姜アジュモニの語りが最後の最後でジェハに消費、占有させられる点だ。ジェハはその波乱万丈の人生譚を聞きながら、彼女をどう位置づけるべきか分からず、単身「帰国」した自らの母親と重ねることくらいしかできない。その後、明け方に話を終えた姜アジュモニがかいがかしくジェハの身の回りの世話を始めるところで、ジェハは彼女の母性こそがその最大の美点であることを発見するのだ。そしてそれまでの語りを「朝鮮の母」の集合的な物語へと置き換え、慌ただしく物語の幕は閉じ

る。これは朝鮮女性の理想像としての母性の強調という、1960年代初からのピョンヤンの文芸方針に準じたものだろうが、そのために作品が損なわれたことは否定できない。

とはいえ、この結末のあっけなさは対照的に、作品冒頭で姜アジュモニが見せる駆け引きの描写の饒舌さは注目に値する。姜アジュモニは自らの経験を相対化し、意味づけられる人物として描かれる。当初ジェハの頼みをはぐらかしながら、自分の半生には「自慢するようなこと」がないと話す一方で、「小説化したら10巻にはなるだろう」、「まだ全てを話すのは時期尚早だと思う」とも述べるのだ。彼女は何を語り、何を語らないかの選択権が自らの側にあることを明確に知っている。もし最後まで気が変わらなかつたら、ジェハは話を聞きそびれ小説も書けないままだったろう。つまりこの作品の存在自体が、姜アジュモニという女性の意思一つに委ねられる形で成立していると読むことも可能なのだ。

おわりに

「解放」後の在日朝鮮人作家たちは、日本語と朝鮮語の間、資本主義体制と社会主義体制の間、ソウルとピョンヤンの間で長い間揺れ動いた。冷戦下、日米同盟体制によって植民地主義が温存された日本で、大半の作家たちは狭い日本語の世界に閉じ込められた。金民はこの袋小路から抜け出そうとするかのように、朝鮮語で旺盛な創作活動を行い、在日朝鮮人作家と共和国作家を連結する立役者となった。

創作活動の開始当初から一貫してリアリズムを追求した金民は、在日朝鮮人の生活者たちを、独特な観察眼と言語感覚に裏打ちされた確かな筆致で描いた。そして1950年代半ばからは、社会主義リアリズムの創作方法に忠実に則り、「祖国」への希望と誇りを胸に日本社会で生きる同胞たちに在日朝鮮人の典型を見出していた。当初は在日朝鮮人の読者を想定したものの、しだいに共和国読者を強く意識するようになり、それにつれて作風に変化が生まれた。朝鮮人の民族的自覚を強調し、逆に日本への愛憎入り混じった感情を否定するようになったのは、その一つの表れだ。例えば朝鮮語版「試写

会*」では、ヨンスクの兄が朝鮮戦争期、人民軍の活躍によって急激に民族意識を取り戻し、それが日本人妻との不和の原因となったと書き加えられた。逆に、映画上映中に騒ぐ同胞たちにヨンスクが気を揉む箇所は削除された。悲観的で葛藤を抱える否定的な人物像が、作品から駆逐されていったのだ。

同様に、もっぱら「母性」が強調されるようになったという、女性表象の変容も指摘できる。前述のように「母の歴史*」では、一人の女性の個人史が題名通り母一般の歴史に収れんされる。姜アジュモニには固有名も与えられないままだ。また、同作品の翌年発表の「抱擁*」では、浮浪児の更生に力を尽くす女性教師の生い立ちと内面に丁寧に迫りながらも、結局はその少女を引き取り、自らが本当の母になることを彼女に決心させることで「美談」にまとめ上げた。共和国における女性の伝統的役割の強調を受けて作品のトーンが変化したわけだが、それは必ずしも在日女性たちのリアリティと一致してはいなかったのではないだろうか。

金民が朝鮮語で表現した一世女性たちは、じっさいに朝鮮語でものを考え、生活していた。小説家の梁石^{キムソク}ギルは、済州島方言で話しかける母に日本語で応答したというが、梁のような典型的な二世作家たちは母の手放しの称賛はできても、その母の発する言葉に込められた細かなニュアンスや感情を正確に理解するのは難しかっただろう。金民という作家を唯一無二の存在にしている、朝鮮語作家であり女性を描いた作家であるという二点は、その意味で互いに切り離せない関係だったといえる。金民はその決して長くはない創作期間——冷戦構造にもっとも制約された時期でもあった——の中で、明け方や深夜の暗がりのなかで怒り、笑い、嘆き、学び、おしゃべりをし、たばこの煙を静かに吐き出す、日本の片隅で生きた在日朝鮮女性たちの情景を、作品世界で素朴に、だが豊かに浮かび上がらせたのである。

(注) 柳碧の生年については、畑山康幸氏にご教示をいただいた。